

精神医学から反記号論哲学へ ——フェリックス・ガタリ研究のための覚え書き——

村澤真保呂*

From Psychiatry to Anti-Semiotic Philosophy : A Note for Understanding Félix Guattari's Philosophy

Mahoro MURASAWA*

Félix Guattari (1930-1992) is known as a collaborator of a French philosopher Gilles Deleuze and has been normally regarded by many philosophers as “a second violinist” in their philosophical works. In other words, when philosophers estimated their works, the role of Guattari has been always ignored or underestimated because he was not a “professional philosopher” but a professional psychiatrist or a social activist. However, several researches have changed these estimations of Guattari in recent years, and now many researchers have begun to discover that Guattari was far from a “Robin” of Deleuze as “Batman”, but philosophical predecessor to Deleuze on many aspects. In spite of the movement of rediscovering Guattari now being spread, the understanding of the core logic of Guattari's philosophy remains fragmentary for the researchers because of his writings with full of jargons or peculiar concepts on which his philosophical system is constructed. This research note discusses about Guattari's basic schema of four concepts (Φ, F, T, U) in his *Cartographies schizoanalytiques* (1989) that shows the core logic of his philosophy by focusing on the development of his ideas from theory of psychiatry to anti-semiotic philosophy for further exploration of his works.

1. はじめに

本研究ノートでは、フランスの思想家であり政治活動家、精神科医であるフェリックス・ガタリ (1930-1992) を取り上げ、近年の再評価の背景とその流れを概括する同時に、難解で知られるガタリ思想の解釈にあたって必要となる前提を整理し、そのうえでガタリ思想において中心となる概念のいくつかを検討の週上に乗せることにより、今後の研究につなげることを目的とする。

2. ガタリ再評価の流れ

フェリックス・ガタリは、通常は哲学者ジル・ドゥルーズ (1925-1995) との共著者として知られるフランスの精神科医・哲学者・社会運動家である。とりわけ1972年に出版された『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂症』¹⁾と1980年に出版された続編『千のプラトー：資本主義と分裂症』²⁾は世界的に大きな衝撃を与え、著者であるドゥルーズ＝ガタリの名を不動のものにしたことは、哲学領域のみならず社会科学や人文学の多くの分野でも知られるとおりである。

* 龍谷大学社会学部教授

この二冊をはじめとする彼らの共同著作は、多くの学術分野に影響を与え、いまも与えつづけているにもかかわらず、しかしながら、その評価にあたっては長いあいだドゥルーズのみに対象が絞られ、そこからガタリの名前が省略される傾向があった。その主な理由は、ドゥルーズがフランスの哲学史の伝統を継承する著名な哲学者であり、大学教授であることにくわえ、評価者たちも同じく哲学者であり、哲学史の伝統のなかで二人の著作を位置づけようとする意図をもっていたことにある。そこで精神科医であるガタリは、彼自身もドゥルーズに劣らず多くの著作を残したにもかかわらず、伝統的な哲学界で承認されている用語や図式を使っていないことから、非哲学的とみなされ、評価の対象から外されることになる。そして評価者たちが精神医学や社会科学、自然科学といった多領域の主題を扱う二人の著作を、そこから哲学以外の部分をうまく取り除いて、純粋な哲学的図式へと還元していくと、けっきょくはドゥルーズだけが評価され、ガタリはその「不純物」として片付けられることになってしまう。

実際、筆者が大学院生であった20年前の国内ではそのような傾向が強く、複数のフランス思想研究者から「ガタリがいなければドゥルーズは哲学者としてもっと偉大な著作を書いたはずだ」「二人の共著は、実際にはほとんどがドゥルーズによって書かれたものだ」という話を聞かされたことを記憶している。それはフランスでも同様で、ガタリの著作はもっぱら社会運動や精神医学の分野の研究者が扱うものとされ、哲学的・思想的見地から研究されることはほとんどなかった。

しかし、二一世紀に入ったあたりから、ガタリ再評価の動きが始まり、状況に変化が現れる。たしかに、それは多くの研究者がドゥルーズの研究に取り組んだ結果、目新しい主題がなくなったため、ガタリがドゥルーズ研究者にとっての話題性のある新たな主題として浮かびあがってきたということもあるだろう。しかし筆者の印象では、ドゥルーズ研究が進み、ドゥルーズの評価が世界的に高まっていくにつれて、ドゥルーズ思想を精神分析や社会分析に応用しようとする動きがはじまり、そこで精神・社会分析に取り組んでいたガタリの役割があらためてクローズアップされてきた、というのが実情であろうと思われる。

いずれにせよ、ガタリをドゥルーズとの共同研究における「第二バイオリン」の奏者ではなく、独自の哲学者・思想家として捉え直す動きは、2005年の『アンチ・オイディプス草稿』³⁾をつうじて両者の共同作業におけるガタリの主導的役割を明らかにしたステファン・ナドーの仕事や、2007年に公刊されたドゥルーズとガタリの伝記『ドゥルーズとガタリ：交差的評伝』⁴⁾により二人のあいだの思想的交流と関係を明らかにしたフランソワ・ドスの仕事をきっかけに、しだいに広がっていく。その後、ガタリの未公開著作を編集した2011年のリアヌヌ・モゼール編『人はなぜ記号に従属するのか：新たな世界の可能性を求めて』⁵⁾や2013年のステファン・ナドー編『エコゾフィーとは何か』⁶⁾をはじめ、ガタリの記号論の読解を社会分析に応用した2014年のマウリツィオ・ラツツァラート『記号と機械：反資本主義新論』⁷⁾など、ガタリ独自の思想を正面から評価し、活用しようとする動きが定着した。また英語圏でも2017年夏にオックスフォード大の地理学者であるトーマス・ジェリスらによって、ケリアンやソヴァニャルグなどの一線の研究者たちによる多領域にわたるガタリ再評価の論文集⁸⁾が出版されており、この流れは今後さらに加速すると思われる。

国内においては、80年代末にガタリ訪日以来、ガタリの著作はとくに杉村昌昭をはじめとする研究者によって精力的に翻訳されており、また2000年代になると宇野邦一氏をはじめとするドゥルーズ研究者も翻訳をおこなってきたため、ほぼガタリの著作の大部分は日本語で読める状況にあ

る。またフランス思想研究者によるガタリの哲学的研究もいくつか始まっており⁹⁾、今後も哲学分野におけるガタリ再評価は日本と海外の両方で進んでいくと思われる。

3. 制度論的精神療法と反精神分析——分裂症とオイディプス化

ガタリの思想的歩みは、精神科医時代から始まる。ガタリが生涯にわたって勤務したラボルド精神病院は、制度論的精神医療 *psychothérapie institutionnelle* を提唱するジャン・ウリが、さらに師匠であるフランソワ・トスケルの精神医学的理念を発展させるべく創設した病院である。この病院は中世の古い館と広大な敷地を利用し、患者と治療者の区別をできるかぎり廃し、患者たちと治療者たちのサークル活動を中心に治療活動をおこなう独自の精神医療を展開していることで知られ、現在も世界中から見学者が絶えず訪れる「聖地」となっている。制度論的精神医療とは、かんたんに言えば「制度が人間を縛る」という通常の社会観ないし精神医療観とは逆の立場に立って、「人間が制度をつくる」という観点から制度をそのつど話し合いで変えていき、自主的な社会運営をつうじて精神的治癒を図るという独特の精神医療である。この考え方は、「社会が精神病をつくる」という観点に立った R・D・レインや D・クーバーらの反精神医学の影響を受けつつ、他方ではハイデガーやサルトル、ラカンといった哲学者・精神医学者たちの思想に大きな影響を受け、トスケル、ウリ、ガタリという三世代にわたって発展したものである。ガタリの思想的歩みを振り返るとき、ラボルド病院での精神科医としての取り組みは、その最初の出発点として無視することができない重要性をもつ。

精神科医としてのガタリが分裂症（統合失調症）にかんする独自の観点を確立していったのは、この当時にラボルド病院を特徴的な集団的治療組織として練り上げていく経験をつうじてであったと考えられる¹⁰⁾。その経験をつうじてガタリが得た観点は、第一に、分裂症の治癒は個人の精神内の閉じた領域で起こるのではなく、集合的次元、つまり人間や自然など周囲のさまざまな事物との複合的な関係のなかで起こるというものである。ラボルド病院で過ごす重篤な分裂症患者が、自発性にもとづく社会的関係（けっして支配－被支配の関係ではない）を結んでいくなかで治癒に向かっていくのは、あるいは芸術や演劇サークルの活動をつうじてその表現活動を発展させていくのは、さらに患者の状態が周囲の環境の活性や雰囲気大きく影響されるのは、その自己が固定したものではなく関係のなかで育まれるものだからであるという以上に、そもそも自己というものが集合的な実体だからであり、「自己の内」とみなされる精神が実際には「自己の外」の世界全体を内側に含み込んで成り立っているものだからである（そのような観点はガタリだけの特殊な考え方ではなく、分裂症をはじめとする精神病圏の疾患に真剣に取り組んだ精神科医には珍しくない考え方である¹¹⁾）。

そうであれば逆に分裂症患者とは、その集合性を徹底的に破壊され、孤立へと追いやられた末の病理を示しているのではないか？ 言い方を変えれば、独自の豊かな宇宙を内包している精神が、その豊かさを徹底的に奪われることによって、その宇宙を解体され、自己以外の何者とも結びつくことができず、しかもその自己の内容物である「宇宙」が失われて徹底的に空疎な「自己」へと変容させられた結果こそが、臨床実体としての分裂症者ではないのだろうか？ ガタリがラボルド病院での経験をつうじてそのような考えに至ったことはそれほど不思議なことではない。というのも、当時（いまも）主流の精神医療の基本的方針は患者の「社会化」であり、それは社会的規律の

たたき込み（フーコーによれば「規律訓練」）であるとともに、それこそはフロイト的な神経症の基本的なメカニズムである。したがって、いわゆる「普通」とは異なる宇宙を内包した精神の持ち主が、周囲から異端視され、規律訓練の対象として徹底的に社会化を要求され、その要求に応えようとするとき、その人の内的宇宙が壊れるのは当然である。この点については、ガタリよりも中井久夫の次の文章のほうが明快に説明している。

「統合失調症の人々は、しばしば独特の『宇宙』をもっており、周囲の無理解や否定によって、その『宇宙』が押しつぶされることに、したがってそこに生きる彼ら自身が押しつぶされることに苦しんでいる。そうであれば『社会復帰』と称して、彼らをいきなり社会（彼らの苦しみの原因となった）へと放り込むことは乱暴きわまりないことと言わなければならない。むしろ必要なことは、彼らの『宇宙』を受け入れ、それに共感する人々が現れ（治療者がその最初の一人とは言わない）、それが押しつぶされることなく守られるような共同体がつくられることである。つまり統合失調症者の『社会復帰』とは、彼らを既存社会の鋳型に入れ込むのではなく、彼らの『宇宙』を包み込んで育むような新たな社会をつくることであり、いわば『社会』を『宇宙』へと復帰させることなのである」¹²⁾

このように分裂症を捉え直すとき、当時のフランスで大きな影響力をもっていたフロイト＝ラカンの精神分析理論とその治療は、患者にたいして「自己」の徹底的な反省——「汝は何を欲するか」——を求めるものであり、それは社会的な圧力によって崩壊寸前の自己＝宇宙が押しつぶされる寸前の分裂症者にとっては最悪の治療とみなされる。逆に、先の中井久夫の言葉にあるように、分裂症者の治療に必要なことが彼らの「宇宙」をとともに受け入れ育むことであり、それが一般的な精神医療や精神分析のように「宇宙」を「社会化」して狭い画一化された領域に押し込めるのとは逆に、「社会」を「宇宙化」することであるとしたら、そのような治療のあり方を求める精神療法は、社会を無限の領域へと開くものであり、一種の社会革命とみなされるものとなる。ここで分裂症患者において壊れそうになっている「宇宙」を「分裂症」と呼ぶとしたら——つまり分裂症患者とは、自己の内的宇宙としての「分裂症（的過程）」を社会化によって閉塞させられた人々を指すという観点に立って——先に述べた治療は社会を「分裂症化」することと言い換えられる。さらに「父－母－子」の資本主義社会における核家族構造へと子どもを適応させる機制である「オイディプス・コンプレックス」を社会化の中心的な原動力とみなし、「社会化」を「オイディプス化」と呼びなおすと、それこそは後にドゥルーズとの共著『アンチ・オイディプス』において展開される議論の中心的主題であることは、もはや明らかだろう。

指摘しておく、ここで述べた「自己」を構成する「宇宙」は、たとえ事実上は内と外を区別することができないとしても、見かけのうえでは自己の「内部」にあるとみなされる。つまり、それは「客観」的な見地からは「主観」的な内部世界とみなされる。ガタリの記号論やエコロジー論において重要な「主観性」という鍵概念が、このような自己を想定したものであることは容易に推測できる。つまり後期ガタリが危惧する「主観性の衰退」は、自己を構成する内部世界の過度の社会化にとともなう衰弱であり、それは自己含み込んで構成される外部世界の過度の資本主義化にとともなう解体と裏表の関係にある。そしてガタリの主著のひとつである『分子革命』で、社会革命にとっ

て主観性の革命が必要条件であることが繰り返し述べられるのは、そのような衰退した主観性を回復させるために自己の内外の世界の両方を回復することが必要であるからである。そして死の直前に展開されるエコロジー論においても、その考え方は貫かれる。

「どのようにすれば、人類が責任感を取り戻すような社会的実践をふたたび創り出すことができるのだろうか？　そこで人類が取り戻さなければならないのは、たんに人類の存続にたいする責任感だけにとどまらない。地球上のあらゆる生命、あらゆる動植物の種の未来にたいする責任感もまた取り戻さなければならず、また、音楽や芸術、時間との関係、宇宙 *cosmos* と融合する感覚など、いわば非物質的な種にたいする責任感も取り戻さなければならぬのだ…(略) …エコロジーの挑戦は、古くからの自然を懐かしんでそのなかに引きこもることを目指すのではなく、世界のなかに存在するための新たな方法を、また社会をつくる新たな形式をふたたび発明することを目指している。エコロジーとは何よりもまず精神的・社会的なエコロジーであらねばならない。そうでなければエコロジーの挑戦は無意味であり、あるいはたいして役に立たないだろう」¹³⁾

このようなガタリの政治思想が、ラボルド病院の精神科医としての経験と分裂症患者の治療論に由来するものであるのは、きわめて明白であるように思われる。

4. 共立平面と機械

それでは、ガタリが分裂症患者において抑圧され閉塞させられ、また治癒において回復される「宇宙」=「分裂症（的過程）」とみなしたものは、はたしてどのようなものだろうか。言い換えれば、「社会化」（『アンチ・オイディプス』においては「オイディプス化」）によって押しつぶされ、あるいは社会革命の原動力にもなるその反対物は、はたしてどのようなものだろうか。

ここで分裂症がしばしば「過程」と言われていることを思い起こそう。たとえばドゥルーズ＝ガタリがしばしば参照する R・D・レインにとって、分裂症は一種の内面的な「旅」とみなされた。

「この旅は次のようなものとして経験されます。つまり『内』へ向かっての絶えざる進行、人間の個人の生活を貫いての遡行、そしてすべての人類の、原初的人間のアダムの経験への、そしてまたおそらく動物植物鉱物であることへの溯行貫通超越として経験されます。この旅には、しかし、行くべき道を見失い可能性も多くあります。混乱したり、部分的な失敗をしたり、そして結局最後に難破したりする可能性があります。多くの怖ろしい怪物や靈魂や悪魔に出会わなければなりません。そしてそれらにうちかつこともあるし、うちかてないこともあるのです」¹⁴⁾

あるいは中井久夫によれば、分裂症とは発症以前から発症、治癒へといたる一連の過程であり、患者がその過程を歩むことを補助するのが治療者の役割であり、社会が患者を発症へと追い込んだ原因でもあるために、「けっして治らない病気ではない」が「治るための障壁が非常に多い病気

ある」¹⁵⁾とされる。

ガタリもまた、同じ観点を共有している。ただし、フロイト＝ラカンの精神分析およびその理論的前提である記号論と構造主義とも正面から対決せざるを得なかったガタリは、当時のフランスの知的言説界の状況ともあいまって、また68年の反資本主義社会運動の失敗を経験して、レインの反精神医学よりもさらに徹底した哲学的・政治的考察を余儀なくされる。その状況がガタリを哲学を展開させる大きな要因となるのだが、ここでその哲学をすべてを網羅的に考察する余裕はないので、とくに重要な概念に絞って考察することにしたい。

それは『アンチ・オイディプス』が刊行される直前の時期、つまり草稿の段階にはすでに姿を明確に現し、最終的には『アンチ・オイディプス』の中心概念となる「器官なき身体」として展開されることになる「共立平面 *plan de consistance*」である。

今度は分裂症がしばしば「創造の病」と呼ばれることを思い起こそう。本研究ノートでは残念ながら著作権の都合上掲載することができないのだが、かつて筆者は、分裂症（統合失調症）の患者と健常者を含む比較対象者をあわせて千件近いコラージュを収集した研究者の資料を整理・検討したことがある。そのコラージュのコレクションは、明らかに次のことを示していた¹⁶⁾。

1. 閉鎖病棟の統合失調症患者は、開放病棟の統合失調症患者とくらべて、明らかにコラージュを構成する要素の数が乏しく、また各要素間の関係にも乏しい。また各要素は垂直軸と水平軸を守って並べられ、画一的で創造性に欠け、意欲に欠ける印象を与える。
2. 幼児のコラージュは、同じ種類・同じカテゴリーの要素（たとえば車など）が繰り返し並べられる傾向が強く、また垂直軸と水平軸に沿って配置されるので、一見すると1)と似ているが、その数が圧倒的に多く、意欲を感じさせる。
3. 小学生から高校生に年齢を上げていくにしたがい、各要素の並び方は奔放な配置を示すとともに、相互の関係性を強く示すようになる。さらに通常では結びつかない要素（たとえば人間の顔とペットボトルなど）が結びつけられることが増えるとともに、他の要素とまったく関連のない要素も空間的にデザインを考慮したかたちで配置され、美的かつダイナミックな調和を示す傾向がみられ、創造性の発達を如実に感じさせるものとなる。ただし、中学生の場合は1)や2)と同じ傾向を示すものが増える。

この実験結果において示されていたのは、コラージュには箱庭療法における箱庭やロールシャッハテストにおける反応と同じように、被験者の内面世界のあり方が一定程度まで表出されており、その世界は各要素の配置と関係性のあり方によって表現され、統合失調症（当時の名称では分裂病）の場合は症状が重篤であればあるほど、各要素は関係性を失い、ひどい場合にはひとつの要素しかなかった。逆に健常者の場合、初期の幼児において各要素は「類似」や「カテゴリーの同一性」によって単線的に結びついているが、しだいにそれは複線的となり、空間的になっていく。そして、ある時点で「異質」な要素や「対立」する要素が同一平面に配置され、結びつけられていく。高校生になると、そこで表現される世界はより豊かな印象を与えるようになり、それは上記の特徴に加えて、「関係の切断」や「切断された関係の再接合」「無関係な要素どうしの関係」が複雑な世界を織りなすようになり、ユーモアや美意識、創造性を感じさせるものとなる。

ここで述べた高校生の被験者たちは、おそらくそのコラージュにおいて表現された内的世界をそのまま外的世界として生きていると想定される。したがって、たとえば教室内で対立関係が生じたり、あるいはいじめなどによって自分や知人が孤立したりすることがあっても、おそらく精神的に破綻する可能性は少ないと推測される。というのも、その世界は接合、対立、矛盾、絶縁した要素たちの関係から成り立つものであり、異質なもののたちの織りなす世界だからである。そうであれば創造性とは、異質なものや無関係なものを新たな関係のうちに結びつけ、いわば「個々の関係を超えた関係」へと移行させる過程によって特徴付けられると考えられる。

ガタリは、そのような異質で対立するものが織りなす諸関係からなる平面を「共立平面（一貫性の平面）」と呼ぶ。それはさまざまな要素が次元や同一性、カテゴリといった条件を超えて関係づけて配置し、また関係を切断して配置しなおす動的な運動の帰結、というよりその運動の一時点を示すスナップショットである（それにたいして、その運動そのものをおこなう実体は「器官なき身体 *corps sans organes*」と呼ばれる）。そして、そのときの各要素の配置を「動的編成 *agencement*」と呼び、その動的編成からなるまとまりを「機械 *machine*」と呼んで、構造主義における「構造」概念と対置させる。

ガタリにとって構造主義は、ほんらいは「動的編成」によって構成されたえず姿を変える共立平面のスナップショットを静止した安定状態とみなし、その要素の関係を「構造」と捉え、その構造に従って各要素を配列させようとする考え方である。そのような構造主義は、たとえるなら、ある家族がある時点で父・母・子の三人で撮った写真の家族関係をほんらいの「構造」とみなし、その後に家族が離婚したり新たな子どもを得たりして「父・父の友人・子・子の友人」からなる家族に変わったとしても、そのような関係を認めない。以前の「父・母・子」の関係こそはほんらいの家族「構造」である以上、その関係に戻らなければならない、と考えるからである。

後に「抽象機械」や「戦争機械」として発展することになるガタリの「機械」概念は、上で述べた構造主義の「構造」と対決するためにガタリが考案したものである。そして、それらの哲学的諸概念は他の「共立平面」や「動的編成」といった諸概念と最初から、精神科医としてのガタリの経験と深い意味連関をもっていたと推測される。

5. 反記号論的記号論

このように構造主義とは真っ向から対立する観点に立ったとき、構造主義にとっての最大の鍵概念である「記号」はどのように捉え直されるのだろうか。また、ラカン派の理論にとってもっとも重要な構造とみなされる「言語」はどのように捉えられればよいのだろうか。精神医学者としてのガタリの最大の挑戦はそこから始まるのであり、それは二〇世紀後半に確立した「構造主義」との戦いだけでなく、それを支える歴史的・社会的・経済的・政治的背景との戦いでもある。というのも構造主義は、それは歴史的に構成されたものであると同時に私たちの生活を空間的に構成する、社会的・経済的・政治的体制という動的編成体の要素の一部にすぎないからである。

ガタリはフロイト＝ラカン派の構造主義的精神分析を批判するにあたり、当初から「記号」をめぐる問題が理論的核心にあることを意識していた。というのも、「主観性」という場所を舞台とした動的編成の過程としての「宇宙」ないし「分裂症的過程」と、「オイディプス化」ないし「社会化」の過程との闘争が、端的に「記号」をめぐる闘争であるからだ。

つまり主観性のうちには、一方に「宇宙」があり、それを構成する次元を超えた無数の微細な事物——それは実存的・経験的で、非記号的な事物——としての「実存的領土」がある。そして他方には記号という抽象の実体のおりなす世界である「抽象機械の系統流（以下、抽象機械と略す）」があり、それを構成する無数の微細要素の「流れ」——というのも、先ほどの動的編成体としての機械を構成するのは、プロセスを構成するさらなる微細なプロセスだからである——がある。

一方の「宇宙」と「抽象機械」はともに全体的なものであり、他方の具体的な個々の微細要素である「実存的領土」と「流れ」は、その部分というより、その次元を下ったもの、つまり前者二つを微分したものである。逆に後者を総合して次元を上げていくと、つまり積分していくと前者になる。わかりやすくいえば、細胞の集合体から器官となり、器官の集合体が身体となると、細胞と器官と身体は、それぞれが次元の異なる平面における実在である。そして細胞が集まってその次元を超えて器官となると、その次元の超越は「脱領土化」と呼ばれる。こうしたことを踏まえれば、ガタリの哲学的名著である『分裂分析的地図作成法』の最初のシェーマで示された四つの概念(Φ, F, U, T)の配置の大枠が示されることになる¹⁷⁾。

抽象機械の系統流 (Φ)	宇宙 (U)
流れの経済 (F)	実存的領土 (T)

もちろん、これまでの説明だけでこのシェーマの内容が理解できるわけではない。しかし本研究ノートでは、必要におうじて他の精神医学者や自分の研究経験を参照しつつ、ガタリの精神医学的経験を前提として彼の基本的な哲学的概念へと継承されていく流れを、あまり厳密とは言えない仕方ではあるが、ある程度まで素描できた時点で目的を達成したと考える。それ以上の議論はすでに指定された文字数を超過してしまうので、今後の作業で明らかにするとし、そのためのノートはこれで終わりとする。

付記

本稿は国際社会文化研究所の助成を受けた研究プロジェクト（2016年度個人研究「フランスとイタリアにおける精神医療と社会思想——フェリックス・ガタリ思想の再検討」）の研究成果の一部である。関係者に謹んで感謝の意を表したい。

注

- 1) Gille Deleuze & Félix Guattari, *L'Anti-Édipe : Capitalisme et schizophrénie*, Editions de Minuit, 1972. (=『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂症』宇野邦一訳、上下巻、河出書房新社、2006年)。ちなみに「分裂病」という病名は、日本においては患者が誤解と偏見にさらされる可能性があるとして2002年に「統合失調症」という名称に変更されたが、国外で名称が変更されたわけではなく、また本論で扱うガタリらのフランス語著作の翻訳では「分裂症（仏 schizophrénie）」という言葉が現在まで長らく使用されており、それを日本独自の「統合失調症」という名称に置き換えることは読者の混乱を招くとともに、哲学的文脈で使用されたこの概念の意味を変える怖れもあるため、ここでは従来の翻訳にしたがい「分裂症」という言葉を使う。
- 2) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille Plateaux*, Éditions de Minuit, 1980. (『千のプラトール：資本主義と分裂症』宇野邦一訳、河出書房新社、2010年)。
- 3) Félix Guattari, *Écrits pour L'Anti-Édipe, texte agencés par Stéphane Nadaud*, Editions Lignes et Manifestes,

2005. (『アンチ・オイディプス草稿』ステファン・ナドー編, 國分功一郎・千葉雅也訳, みすず書房, 2010年)。
- 4) François Dosse, *Gilles Deleuze et Félix Guattari, biographie croisée*, La Découverte, 2007. (『ドゥルーズとガタリ: 交差の評伝』杉村昌昭訳, 河出書房新社, 2009年)
- 5) Félix Guattari et Liane Mozère, *Ligne de fuit: Pour un autre monde de possibles*, Éditions de l'Aube, 2011. (『人はなぜ記号に従属するのか: 新たな世界の可能性を求めて』杉村昌昭訳, 青土社, 2014年)。
- 6) Félix Guattari, *Qu'est-ce que l'Écosophie? textes présentés et agencés par Stéphane Nadaud*, Lignes/Imec, 2013. (『エコゾフィーとは何か』ステファン・ナドー編, 杉村昌昭訳, 青土社, 2015年)。
- 7) Maurizio Lazzarato, *Signs and Machines: Capitalism and the Production of Subjectivity*, Semiotext(e), 2014. (『記号と機械: 反資本主義新論』杉村昌昭訳, 共和国, 2015年)。
- 8) Thomas Jellis, Joe Gerlach, and Jon-David Dewsbury (eds.), *Why Guattari? A Liberation of Politics, Cartography and Ecology*, Routledge, 2017.
- 9) たとえば山森裕毅『ジル・ドゥルーズの哲学: 超越的経験論の生成と構造』(人文書院, 2013年)では補論でガタリが取り扱われ, また増田靖彦「主観性の生産/別の仕方での思考する試み: フェリックス・ガタリを中心として」(齋藤元紀・増田靖彦編『21世紀の哲学を開く: 現代思想の最前線』, ミネルヴァ書房, 2016年)ではガタリの思想的歩みと特徴が概括されている。
- 10) フェリックス・ガタリほか著『精神の管理社会をどう超えるか』(松籟社, 杉村昌昭ほか編訳, 2000年)。
- 11) たとえば中井久夫は『『ここ』とは, 先に述べたように, 『ここ』にいる人のうちに何らかの実体——端的に言ってその人の住まう世界, 否むしろ宇宙と呼ぶべきもの——が目に見えないかたちで局在化したものであり, そして, そのようなかたちでしか生命をもたないものなのである』(中井久夫『ここ』, 杉村昌昭他編『既成概念をぶち壊せ!』見陽書房, 2016年)と述べ, その内外を区別することができないと説いているが, これが彼の統合失調症治療の長い経験にもとづいた観点であることは言うまでもない。
- 12) Ibid.
- 13) フェリックス・ガタリ「エコロジーの倫理的争点」(村澤真保呂訳, 『現代思想』2011年11月号), p.31. 原著は2009年7月24日のフランスの新聞「リベラシオン」にガタリの死後に発見された原稿が掲載されたものである)。
- 14) R・D・レイン『経験の政治学』笠原嘉・塚本嘉壽訳, みすず書房, 1973年, p.133.)
- 15) Ibid.
- 16) 残念ながらその研究成果は, 非公式な研究会などでは発表されたのだが, 当時急速に著作権とプライバシー解釈の厳格化が進み, 残念ながら書籍として公表することはできなかったため, 現在そのコレクションは筆者の研究室に保管されている。
- 17) Félix Guattari, *Cartographies schizoanalytique*, Galilée, 1989. (フェリックス・ガタリ『分裂分析的地図作成法』, 宇波彰ほか訳, 紀伊國屋書店, 1998年)。